

地域の底力 大分県豊後高田市

# 懐かしい昭和三十年代を 今に呼び覚ます町 「豊後高田」を訪ねて

取材・文 千葉望 写真 栗原克己

古代から発展を遂げた土地・九州の国東半島<sup>くにとうみ</sup>。ここに<sup>ぶんごたかた</sup>ある豊後高田市は、「昭和の町」をコンセプトに新たな町づくりを行い、話題を集めている。その町づくりとは、単なる観光振興にとどまらず、町の人のための商店街活性化も含んだ、地に足の着いたものだった。まだ道半ばという町づくりの取り組みを、現地に訪ねてみた。





豊後高田「昭和の町」は、昭和30年代をほうふつとさせる商店街である。町おこしのための作り物ではなく、実際に今も生きている町だ。



## 誰もが懐かしむ 昭和三十年代を再現

大分空港からバスでおよそ一時間。片側一車線の緑豊かな道を通って豊後高田市に到着した。到着したバスターミナルから中心部は見えず、さてどこが全国から観光客を集める「昭和の町」にあたるのかと、まず思う。そんな不審は三分と歩かないうちに氷解

した。中心部に入る手前に、古い蔵を移築した「昭和ロマン蔵」と懐かしい駄菓子やおもちゃがいっぱいに展示された「駄菓子屋の夢博物館」「昭和の夢町三丁目館」、黒崎義介の作品を集めた「昭和の絵本美術館」、飲食ができる「旬彩 南蔵」などの複合施設が広がっていたからである。施設の入り口に置かれているのはこれも懐かしいボンネットバス。きれいに修復され、実際に走

ることもできるという。蔵の長い庇の下にはベンチがあつて、観光客が一休みできるが、そのそばに並ぶのは昭和三十年代に活躍した「ダイハツミゼット」をはじめとするクルマの数々である。中にはちゃんとナンバープレートも付けたものもあつて、現役であることを示していた。予約をすれば、これら昭和の名車を借り切つてドライブツアーもできるといふ。往年の車ファンには嬉しい趣向だ。

だが、豊後高田市「昭和の町」はここが中心ではない。地方によつては新たに作った施設が主役になることが多いが、豊後高田市の主役はあくまでも市内の商店街である。早速商店街を歩いてみた。平日だというのに、観光客の姿がある。ツアーと思われる集



団も、案内人を務める地元の人を中心に嬉しそうな表情で町をそぞろ歩きしている。

上／昔懐かしいボンネットバスも修復され、現役で働いている。／下「昭和ロマン蔵」前に並ぶダイハツミゼットなどの車は皆のあこがれだった。





事業を経営しながら、市の発展に力を尽くしている豊後高田市観光まちづくり株式会社代表取締役の野田洋二氏。



服屋さんもある。昭和三十年代はこのようにいろいろな商いをする店が集まって、活気があったものだった。今では日本のほとんどの地方で、郊外型のスーパーマーケットや家電量販店ができ、廃れてしまった商店街。全国にシャッター通りができ、車に乗ることに慣れた人々



首をかしげているのはご存じ「ビクターの犬」。



は古い商店街に見向きもしなくなった。尻すぼみになる商売に、後継者は故郷を捨て、都会に出ていかざるを得ない。

## 何もない町だったから生まれたアイデア

「豊後高田市観光まちづくり株式会社」代表取締役の野田洋二氏は、地元で設備会社を経営し、かつ豊後高田商工会議所副会頭を務めながら、町づくりにもかかわってきた。この会社がある建物も、先に述べた観光施設と同じ敷地に建っている。オフィスには豊後高田市の観光振興推進室も同居しており、「まちづくり株式会社」の仕事を経営支援している。

「町づくりの話が持ち上がったとき、豊後高田市の商店街は四割が空き店舗だったのです。しかも、冬の寒い日とか日曜日に調査すると九割が閉まっている。お客さんが来ないからですが、九割の店

が閉めてしまったら、もう商店街とは言えません。それが今から一〇年前のことです」

そんな状況を何とかしたいと立ち上がったのが、野田氏や、現在「ツーリズムおおいた」事務局長を務める金谷俊樹氏である。金谷氏の実家は浄土真宗の寺院だったが、<sup>だんか</sup>檀家の急減とともに今では廃寺となっている（こういう寺院が地方にだけあることだろうか）。京都の大学を出て、京都のアパレルメーカーで企画の力を磨いた後、故郷に戻ってきた。金谷氏は語る。

「思い返してみると、帰ってきた当時の豊後高田市は悲惨な状態でした。大分県の中でも最低最悪の商店街。『犬と猫しか歩かぬ』とか『商店街の中で鉄砲を撃って



豊後高田市の特徴は何か考え抜いて「昭和の町」のコンセプトを生み出した仕掛け人・金谷俊樹氏。現在は社団法人ツーリズムおおいたの事務局長として、大分県全体の観光振興の仕掛けづくりに知恵を絞っている。

も死人が出ない』と言われていたほどです。人の心も完全にやる気をなくしていた。でもその中で、ごく何人かですが、眼をきらきら輝かせる人があったわけです」

Uターンして市の商工会議所に勤務していた金谷氏は、輝く目を持った人々とともに、豊後高田市を蘇らせるアイデアを探し求めた。コンセプトを作る前に全国の町を視察し、町内でも徹底的に調査をし、「歴史の棚卸し」も行った。町の人も知らない歴史が埋もれているかもしれないことがわかった。一体何をコンセプトに豊後高田の町づくりをすればいいのか、データと歴史から浮かび上がらせようとした。そこで見えてきたものが幾つかあった。

豊後高田市は歴史を感じさせ



豊後高田「昭和の町」の特徴は商店街が町の住人のために生きていることだ。

る名前であるが、基本的には商人の町である。安土桃山時代から江戸時代の初めにかけては城下町だったが、わずか十数年間殿様が

いただけで、あとは島原藩の飛び地となっていました。城下町としての伝統や気風は薄い。大正時代には大分県一の大金持ちといわれる人物が豊後高田市の商店街に進出し、町は発展の頂点を迎えた。だが高度成長期を過ぎると、後は坂を転げ落ちるばかりだった。歴史のある城下町であれば、その遺跡や伝統を観光の柱にしようと考えたかもしれない。

「それができないことが分かっていったから、知恵を絞って考えたのが『昭和の町』というコンセプトでした。これで歴史にプライドを持つ町だったらうまくいかなかったかもしれない。でも私たちは天からの恵みのように『昭和三十年代』というテーマをもらったんです。江戸時代とか大正時代など、柱とするテーマが浮かんでは消えた時、『いくら理屈の上では誇りに思える歴史でも、自分の記憶にない。だけど昭和三十年代なら、じいちゃんばあちゃん、父ちゃん母ちゃんが笑顔で誇りを持って商いをしていたことが思い出せる』と。あの時代に帰れるんなら町の人もぐっと気持ちが入

る、と思えました」

と金谷氏は言う。商店街の人々に「昭和の町」というコンセプトを提示した時、もちろん反対意見はあった。何か新しいことをしようとするれば反対意見はつきものである。だが、野田氏や金谷氏は市のキーパーソンを説得し、反対意見を突き崩していった。言い換えれば、町にある「財産」はそれぐらいだったのかもしれない。だから最終的には何とかまとめることができた。市、商工会議所、商店街が一体となった町づくりが始まった。

衰退する商店街。跡継ぎのめどが立たなければ店を新しくする気にもならない。その分、店の奥にはあるじが忘れていたようなお宝もあった。「昭和の町」のコンセプトに共感し、一緒に町づくりを進めようとしてくれる店には、まずお宝探しから始めてもらい、見つかったそれを店に展示する。「二店一宝運動」と名付けた。そして、店ならではの商品売り出すことを「二店一品運動」とした。協力店舗には「昭和の店」を名乗って共通の看板を下げて

らい、運営を全面的にバックアップすることにした。「昭和の町」に協力する店舗とそうでない店舗には観光案内地図に載せるかどうかなど、さまざまな差をつける。また、「昭和の町」や「昭和の店」にすぐわかないプランは却下する。そうでなければ、町全体としての統一感が保てないからである。

その結果、工夫と努力を重ねる参加店には自然に客が集まっていき、反対していた店の経営者も「自分の所も参加したい」と希望するケースが増えてきた。

## 「昭和の町」の 舞台で頑張る人々

商店街の中に古いたたずまいをそのまま残す「昭和の店」一四号店・千嶋茶舗がある。「昭和の町」のランドマークとも言えるべき建物だ。店主の千嶋敏夫氏は、父が遺した病院や老人福祉施設の経営にあたりながら、夫人とともに祖父の遺した「千嶋茶舗」を営んでいる。引き戸を開けて中に入ると、香ばしいお茶の香りが漂って



夏に欠かせない  
アイスクャンデー  
売りの自転車。



きた。以前は皆、こういう店から必要な分だけ好みのお茶を売ってもらっていたものだ。店内には「お宝」である古い茶箱が積まれている。昭和三十年代まで、茶箱は衣装箱としても重宝されていた。

「入ってこられたお客さまは、茶箱を見て『懐かしい』と感激されますね」

と千嶋氏。店内に置かれた古い机や文房具もずっと使われてきたものだ。「千嶋茶舗」では観光



下／「千嶋茶舗」の人気商品・玄米茶は香り高く、お湯でも水出しでも美味。



上／町に品格を醸し出す「千嶋茶舗」の経営者・千嶋敏夫氏。社会福祉法人を運営し老人福祉に携わりつつ、老舗の茶舗を守っている。

客が入ってくると自慢のお茶を入れてもてなす。ペットボトルは便利だが、適温のお湯を使い急須で入れたお茶には捨て難いおいしさがある。「隣の家ともたれ合っているような」と千嶋氏が言う古い建物だが、幸い根太は緩んでいない。これからも「ランドマーク」として町を支えてくれそうだ。

「千嶋茶舗」のように伝統を持ち、それを活かしている商店もあるが、新たに商店街に参入して活路を見いだそうとしている商店もある。もち菓子で知られる「昭和の店五号店・二代目餅屋清末

杵や」もその一つだ。もともと「杵や」は商店街から少し離れた所で商売を営んでいた。跡取り息子であった清末浩一氏は、東京の大学を出てしばらく都市銀行に勤めていた。

「いずれは豊後高田に帰るつもりで、妻にもそう言い続けていました。故郷が大好きだし、子供たちを自然の中で育てたかったんです。でも子供のころから商売を手伝ってあんこをこねたり、もちを丸めたりしていたから、この商売がもうからないことは分かっていた。だから、保険か不動産の仕事をしようか、と思っていたましたね」

外から衰退する故郷を見ていたこともあって、町を何とかしたいという思いは人一倍。「昭和の



上／「杵や」の清末浩一氏・素子さん夫妻は東京からのＵターン組。左／これが貫禄ある「杵や」のお宝・もちつき機。



町」のコンセプトを知り、新規出店者には県と市の支援が得られると分かって、「杵や」出店を決意した。店のお宝は、見事なもちつき機である。「杵や」では自然の素材を大切にし、保存料などを一切使わずに体によい菓子を作ることをモットーとしている。だから売り切れたらおしまい。落花生をつき込んだピーナツもちを味わってみたが、白と杵でついたもちそのものの歯応えを感じた。





左／雄々しく鉄人28号が立つ「駄菓子屋の夢博物館」内部。駄菓子屋さんのケースには子供たちの夢がいっぱい。下／グリコのおまけやメンコ、プラモデルなど、「その昔子供だった大人たち」が夢中になる。



## 新規出店ながら、「昭和の町」

のコンセプトに合わせて店内を内装してあるから違和感がない。「杵や」の菓子は観光客に人気だ

が、中でお茶も飲めるとあって地元客も集まって来る。とりわけ独居老人が多く、町のサロンのようなものだ。清末氏の夫人・素子さ

んはそんな老人に気さくに声を掛ける。

店内に貼<sup>は</sup>り出された「寅さん」のポスターが懐かしい。

「これは、『駄菓子屋の夢博物館』館長が貸してくださったんですよ。開店するときも、皆さんが全部手伝ってくださって感激しました」

内装や商品はもちろん、人と人との付き合いも商店街が活気のあった時代そのままに――。友人を訪ねてやって来る老人たちの姿を見ていると、清末夫妻のそんな心根が浸透しつつあることが伝わってきた。清末氏はこのほかにも県や市のさまざまな活動に参加している。

「なんだか、銀行マンだったときと変わらないくらい忙しい」と笑う。

「杵や」に自らポスターを貼り出したという「駄菓子屋の夢博物館」の館長・小宮裕宣氏を訪ねた。館内は何万点ものおもちゃやポスター、菓子類でいっぱい。ここでも何時間でも過ごせる気がする。昭和を知る人はもちろんのこと、子供たちにとっても夢のような

空間だろう。小宮氏はもとと福岡で輸入雑貨業を経営する傍ら、捨てられていくこれらのおもちゃ類を集めてきた。その数数十万点。収蔵に困るほどのコレクションに、金谷氏が目を付けた。

「最初は太宰府から話があつて、そこに資料館を作りました。そうしたら一年もたたないうちに金谷さんが来て、『豊後高田でやりませんか』と。大分は知らない土地なので断り続けていたのに、お祭りに少し収蔵品を貸し出したのがきっかけで、とうとうこの施設ができ、館長として単身赴任することになってしまいました（笑）」

自分を「駄菓子屋のおやじ」と言う小宮氏だが、来訪者の反応にはいつも驚かされる。中に入っただけで「渡辺のジュースの素」を見つければ、涙を流す人。グリコのおまけに歓声を上げる人。力士や野球選手のメンコに、昔話を始める人。五円、一〇円の小遣いを握り締めて駄菓子屋さんに走っていった子供時代に、みんなあつという間に帰っていく。

「ここには高価な品はほとんど



コレクションが「駄菓子屋の夢博物館」に収められ、館長を務める小宮裕宣氏。懐かしい光景がここに。



ありません。ただ、このよさは人に近いこと。駄菓子屋さんそのまものものを置いてあるから、誰もが懐かしく思い、喜んでくれるんだと思っています」

おもちゃのほか、当時の茶の間や台所を再現したコーナーも人気を集めている。

## 観光振興だけを目的としない活性化

県や市の肝いりで生まれた「昭和の町」というコンセプト。これが話題となって全国から観光客がやって来る。バスツアーにも組み込まれ、豊後高田市の取り組み

は成功事例として取り上げられ、表彰も受けた。だが、野田氏や金谷氏は、観光客誘致が目標とは考えていない。

「たくさんの人に来てもらうのは大事ですが、商店街が観光客向けの土産物売り出したら、そこで『昭和の町』は終わります。どこにでもあるただの観光地になってしまう。昭和三十年代の商店街は町の人たちが生き生きと暮らしていたから魅力的だったのです」

と金谷氏は言う。確かに観光に来る人たちも、寺社巡りなどとは違い、ここがそのまま昭和三十年代の空気を残していなければ

ピーターにはならないだろう。町の人口が維持され、あるいは増え、活きた商店街として「昭和の町」が機能すること。それがポイントである。

「ここは一五〇店舗あるんですよ。そのうち『昭和の町』となつたのが四〇。それをもっと増やしていかなければ」

と野田氏は考えている。観光は水もの。ブームが去ったとき、さらに町が衰退したのでは意味がない。金谷氏も言う。

「今、ネット通販が盛んですけれど、ここには生きた商店街がありますので、うまくいけば必ずブランドになり、物販の売り上げも

増えるはずだと思います。また、高齢化が進む地域のため、家に向いて買い物を手伝う御用聞き的機能を取り戻すなど、商店街の努力も必要ですね」

豊後高田市のある国東半島は古代からの長い歴史を持つ土地柄。宇佐神宮や富貴寺など見どころが多い。魚介類などの美味、風光明媚な景色、そして個性的な温泉の数々。「昭和の町」をさらに発展させるためにも、これからは豊後高田市にとどまらず、さまざまな資源を発掘し、組み合わせ、いく広い視野が求められている。野田氏や金谷氏の仕事は、まだこれからである。